

令和元年度名古屋市教育委員会第24号議案

名古屋市指定有形文化財の指定について

名古屋市文化財の保存及び活用に関する条例（昭和47年名古屋市条例第4号）第2条第1項の規定により、下記の文化財を名古屋市指定有形文化財に指定する。

記

1 名古屋市指定有形文化財に指定するもの

種別	名称	員数	所在場所	所有者
彫刻	木造薬師如来坐像	1 軀	名古屋市西区名塚町 2 丁目 60 番地	宗教法人 新福寺
彫刻	木造馬頭観音および熱田大明神・天照皇太神立像（附 千体仏）	3 軀および 附 535 点	名古屋市守山区竜泉寺 1 丁目 902 番地	宗教法人 龍泉寺

2 指定日（名古屋市文化財の保存及び活用に関する条例第2条第5項）

令和元年9月9日

令和元年 7月26日

名古屋市教育委員会 様

名古屋市文化財調査委員会
委員長 安田 徳子



名古屋市指定有形文化財の指定について(答申)

名古屋市文化財調査委員会に対して名古屋市文化財の保存及び活用に関する条例第2条第4項の規定により諮問のあった名古屋市指定文化財の指定について調査審議の結果、下記のとおり答申します。

記

1 名古屋市指定有形文化財の指定を可とするもの

種別	名称	員数	所有者
彫刻	木造薬師如来坐像	1 軀	名古屋市西区名塚町 2丁目60番地 宗教法人 新福寺 代表役員 風戸 孝文
	木造馬頭観音 および熱田大明 神・天照皇太神 立像(附 千体 仏)	3 軀および 附・535点	名古屋市守山区竜泉寺 1丁目902番地 宗教法人 龍泉寺 代表役員 佐藤 正延

名古屋市指定文化財答申書

1 名称

木造薬師如来坐像

2 員数

1 軀

3 種別

彫刻

4 所在地

名古屋市西区名塚町2丁目60番地

新福寺

5 所有者

名古屋市西区名塚町2丁目60番地

宗教法人新福寺 代表役員 風戸 孝文

6 現状 針葉樹材（ヒノキ）、一木造、漆箔（現状剥落）、像高45.3cm

新福寺本堂の厨子内に安置される薬師如来坐像で、やや大きめの肉髻をあらわし、螺髪は粒状とし、三道をあらわす。肉髻朱・白毫は欠失し（痕なし）、彫眼、耳朵垂部を環状とする。衲衣は右肩に少し懸かる偏袒右肩に着し、先端を左肩背面に垂下する。左手は膝上で掌を仰いで（与願印）、薬壺を載せ、右手は屈臂して掌を前に向けて立て、五指を伸ばす（施無畏印）。左足を上に結跏趺坐する。

構造はヒノキとみられる針葉樹材の一木造で、頭体幹部は左肩を含み、地付まで縦一材で彫出して内削りを施さず、木芯を正面中央近くにはずす。左前膊半ばより先および左手首で矧ぎ、右は肩先、肘、手首で矧ぐ。両脚部横一材を矧ぎ、膝奥に三角材（左は欠損）を矧ぎ、前後に鋸を計3本（中央、左、右、各4.5cm）打つ。膝前部は別材とし（欠失）、持物薬壺も別材とする。仕上げは体部を錆下地漆箔とし、螺髪を彩色。

左手首先、右肘先および手首先、耳朵垂部、持物は後補とし、鼻先、裳先、左膝奥小三角材を欠損、表面の漆箔は胸などの一部を残して摩損し、彩色も剥落する。

小ぶりの像でもあることから簡明で古様な構造をもつが、細かい螺髪やなだらかな体形、穏やかな面貌、浅い衣文に藤原時代、定朝様式の影響がみられる。面貌や衣文に柔らかな彫口が残ることから、保安（1120－1123）銘をもつ京都・高田寺薬師如来坐像（重文）等に近い12世紀前半の作例とみられ、やや大きめの肉髻から、天台系寺院の薬師如来坐像であった可能性が高い。

7 法量（単位 c m）

像高	45.3		
髮際高	39.0		
頂一顎	16.0		
面長	8.7		
面幅	8.6		
面奥	11.5	（鼻先欠損）	
耳張	11.1		
胸奥	12.0		
腹奥	13.0		
肘張	26.0		
膝張	37.0		
坐奥	24.5		
（裳先奥）	—	（裳先欠損）	材幅 21.0 c m

台座、光背欠失

8 指定理由

(1) 本像は、左肩を含む頭体一木造で内削りのない古様な構造をもつが、細かい螺髪やなだらかな体形、穏やかな面貌、浅い衣文に藤原時代、定朝様式の影響が認められる。面貌や衣文に柔らかな彫口が残ることから、12世紀前半の作例とみられる。やや大きめの肉髻から、天台系寺院の薬師如来坐像であったことも考えられ、簡略な構造や淡白な彫口から、都の流行に倣った周縁的作例の一つとみられる。摩損も少なくない小像ではあるが、市内に遺る数少ない平安後期仏像として貴重である。

(2) 稻生山威徳院を号する天台宗寺院・新福寺は、もとは現・庄内緑地にあたる庄内川堤内中洲にあったが、慶長19年（1614）秋の大洪水により、旧新福寺村の村民ごと現地に移転したと伝えられる。創建については、寺伝では天平年中、行基により薬師如来像を祀った草堂が営まれ、後に慈覚大師（円仁）が大伽藍十二坊

を建立したと伝えられるが、水難により寺記・什物等を多く失い、確かな史料には乏しい。慶長の洪水後の移転については、現在も近隣一帯には新福寺町の名があり、近在の宗圓寺（曹洞宗）もまた庄内川内から同年に移転の伝がある。

移転後の元和年間（1615－1624）に秀純法印による本堂の再興・修造があり、文政年間には仁王門が建立されて金剛力士の古像が安置された。秀純法印は密蔵院第二十九世で、守山・龍泉寺を慶長3年（1598）に復興した秀純と同一人物であろう。江戸初期、春日井・密蔵院は地域の天台寺院の本山として復興に関わり、元和5年（1619）、第三十一世・珍祐（天海僧正弟子）の代には名古屋城東照宮神宮寺・尊寿院の初代別当となって、藩主の帰依も大きかった。そうした状況下で新福寺再興・修造も行われたと考えられる。文政11年（1828）「人別改張」（密蔵院文書）には、寺内人数1名の密蔵院末寺として記載されている。

明治24年（1891）地震で仁王門が倒壊し、以後、次第に衰微して一時は住職無住となり、大正末年頃は稲沢の天台宗寺院・下津圓光寺の住職が兼務した。しかし、現在も本像をはじめ本堂には金剛力士像（平安中～後期）など、平安後期に遡る古仏を伝えている。本像は、寺伝にいう創建時に遡る作とはみられないが、旧新福寺または付属する十二坊のいずれかより伝来した可能性はあり、当地域の歴史的形成を考えるうえで、核となる貴重な遺作例である。

名古屋市指定文化財答申書

- 1 名称
木造馬頭観音および熱田大明神・天照皇太神立像（附 千体仏）
- 2 員数
3 軀、および附 535 点
- 3 種別
彫刻
- 4 所在地
名古屋市守山区竜泉寺 1 丁目 902 番地 龍泉寺
- 5 所有者
名古屋市守山区竜泉寺 1 丁目 902 番地
宗教法人龍泉寺 代表役員 佐藤 正延
- 6 現状（品質、形状、銘、大きさ、構造、仕上げ、保存状態、制作年代、由来沿革等）針葉樹材（ヒノキ）、一木造、現状素地（柿渋塗カ）、一部墨彩、総高 113.9 cm（馬頭観音立像）、101.7 cm（熱田大明神立像）、101.6 cm（天照皇太神立像）、3.5～4.8 cm（附・千体仏）

庄内川を望む高台に建つ天台宗古刹・龍泉寺の宝物館に安置される馬頭観音立像、熱田大明神立像、天照皇太神立像の計 3 軀および千体仏 535 体で、千体仏の一部は庫裡に別途収蔵される。いずれもヒノキとみられる針葉樹材の一木造で、各木芯をはずした縦一材から台座を含む全容を彫出し、内刳りを施さない。中尊の馬頭観音立像をやや大きめとし、向かって右に熱田大明神立像、同左に天照皇太神立像を配するという類例の少ない独自の三尊構成をとる。いずれも背面は矧面を浚って平滑にし、梵字、および尊名、年記、作者等の銘文を墨書する（後掲）。

中尊は胸前で合掌し、両足先を大きく開いて蓮台（仰蓮・基台）上に直立する馬頭観音立像で、大きめの頭部に焰髪とし、頭頂低平で前頭部に馬の顔を彫出する。冠・肉髻朱・白毫・三道はあらかわさず、耳朶垂部は不環とし、深く刻まれた連眉や突出して眦をあげた眼、大きな鼻は瞋怒相に近いが、閉口し口角をわずかに上げた口元には微笑相がうかがえる。観音像ながら衣を通肩状にまとい、裙を着け、各部の襷を段状に強く刻み、袖先を鱗状に左右に突出させる。面部や体軀の全面に粗い

刀目を残して彫出し、三尊中でもっとも重厚な木質感をあらわす。

両脇侍のうち熱田大明神立像は地髪を顔面幅で高く立ち上げ、縦に段状の疎彫とし、両手を拱手して胸前で大型の如意宝珠を奉持（共彫）する。天照皇太神立像は巾子冠を被り、髪は平彫、拱手して胸前で笏を持って直立する。両像とも眉や眼を浅く陰刻し、閉口して、足先をあらわさず、面取した三角材の角を正面中央に向けて台座とみなす。衣はともに馬頭観音像に準じるが裙を着けず、段状の襷はより浅く大まかで、刀目も穏やかである点が共通し、とくに天照皇太神立像は最も簡略化されている。両脇侍は総高および地付幅をほぼ同寸法とし、木質も共通することから、一本の角材を対角線で切った同材から造像されたとみられている（『愛知県史』）。

千体仏は三角柱状の木片から彫出された 3.5～4.8 cm の一木造で、頭部は山型に隆起し（一部像は焰髪）、髪際・目鼻を簡略に陰刻し、衣と裙を着け、拱手して直立する（一部は、台座上に坐す）。現存は 535 体であるが、『愛知県の円空仏』（1990年12月刊）には 566 体と記される。

三軀および千体仏ともに現状素地であるが、中尊には当初、柿渋彩が施されていたとも考えられる。馬頭観音立像の瞳は墨彩とし、馬の顔、鼻先、白毫部分、襷の一部に、あたり線とみられる墨痕がみられる。馬頭観音立像の地付、基台・仰蓮部分に朽損があり、背面左肩から袖先の一部を欠損するが、保存状態は良好である。

背面の墨書銘により、延宝4年（1676）立春における、「日本修行乞食沙門」すなわち円空（1632－1695）満44歳時の基準作例と判明する。

〈銘〉

（馬頭観音立像）背面上部に金剛界五仏種子（大日バン、阿弥陀キリーク、不空成就アク、阿闍ウーム、宝生タラク）を墨書し、背面左側・同中央・同右側下方に以下の墨書銘がある。延宝四年は西暦1676年。四は異体字。

	龍	
延	泉	
宝	寺	
四	大	
丙	慈	
辰	大	日
立	悲	本
春	観	修
大	音	行
祥		乞
日		沙 食
		門

(熱田大明神立像) 背面に大きく墨書

天 熱 左
右 田
大
明
神

「左」は、 主尊・馬頭観音立像の左（向かって右） に安置することを指示。
「天右」は、天照皇太神は右安置の意か。

〈天照皇太神立像〉 背面に大きく墨書

天
照
皇
大
神

7 指定理由

(1) 本像は、背面の墨書銘により延宝4年(1676)における「日本修行乞食沙門」すなわち江戸前期の遊行・作仏聖として知られる円空(1632-1695)の、満44歳時の基準作品として知られる像である。

※年号については、貞享3年丙寅(1686)説もあるが、①昭和40年代の写真が「丙辰」と読める ②『浄海雑記』全精法印(荒子観音寺18世住職著、1859年頃成立)に、延宝4年の荒子観音寺「両頭愛染法」奥書にも「日本修行乞食沙門 圓空」を自称したことがみられる ③「金剛界五仏種子」は寛文9年(1669)から延宝7年(1679)にかけて用いている。④力強い作風が荒子観音寺と共通するとみられること、などから延宝4年説が有力とされる。

(2) 円空の造像活動は、寛文3年(1663)の岐阜・郡上美並村での作例を初例として畿内以東、多くの地域で行われた。寛文6年(1666)の北海道、青森、秋田への巡錫・造像、同9年(1669)の名古屋・鉾薬師堂諸像造頭の後、同11年(1671)に奈良法隆寺で「法相中宗血脈」を受け、伊勢(延宝2年)、大峯

山（延宝3年）へと修行しており、この間に生涯に十二万体の作仏を志したとみられている。龍泉寺馬頭観音・熱田大明神・天照皇太神の三像は、円空が修行者としても作仏者としても確立期に入ったこの期の力作であり、同年作の観音寺諸像（名古屋市中川区荒子町）とともに、壮年期の代表作と位置付けられる。また龍泉寺の「千体仏」は、円空の活動を特徴づける省略法による木端仏の多作造頭として早期の作例である。

(3) 本像が馬頭観音立像を中尊とし、熱田大明神立像を配する構成であるのは、龍泉寺の創建由緒・靈驗譚にもとづく。龍泉寺は、寺伝「龍泉寺記」（宝暦5／1755年）によれば、最澄が熱田神宮に参籠の折、龍神の住むとされた当寺の多々羅池畔で読経中に龍が昇天し、馬頭観音が出現したことから、寺名を「龍泉寺」、本尊を馬頭観音像としたと伝えられる。熱田の八剣宮奉祀の八剣のうち、三剣は当寺の地中に納められたと伝承され、熱田神宮の奥の院とも称された。空海が熱田神宮に参籠の時にも当山に参拝したという。

東谷山の麓から龍泉寺に至る一帯は、4世紀から7世紀の古墳群が集中する地域で、尾張氏の本拠地であったところである。庄内川を望む要所である当寺域は、早くより、川の治水・水利に関わる霊所として民俗的な龍神信仰のあった地と考えられ、やがて熱田神宮の奥の院として周辺に多く建立された天台系神宮寺（春日井・円福寺、高蔵寺、守山・持星寺、白山寺（廃絶）など）の一つである。すでに13世紀には著名な寺であったとみられ、『沙石集』巻二（弘仁6／1283年成立、編著：無住道暁1227－1312）にも、馬頭観音像が信仰をあつめた寺で、龍王が一夜にして造立供養したとの伝説や、承久の内乱（承久3／1221年）で負傷した尾張国山田郡の右馬允明長が龍泉寺僧に危難を救われた靈驗が記されている。

天照皇太神像については、伊勢内宮に祀られた皇祖神・天照大神の異称であり、円空が延宝2年（1674）に伊勢神宮に参拝していることから、円空の伊勢信仰にもとづくものとみられている（『愛知県史』）。円空はすでに寛文3年（1663）、岐阜・美並村神明神社に男神の天照皇太神像を造立している。中世以来、熱田と伊勢は「一体分身の神」（『熱田宮秘釈見聞』）とみなされているが、本像のように熱田大明神像に女神風の頭部を配し、天照皇太神像を対の男神として、馬頭観音立像の左右に配する三尊構成は円空独自のものとみられ、その思想を解明するうえで重要な作例である。

(4) 本像造立の直接の事情、施主関係等の詳細は明らかではない。勝地にあった龍泉寺は、戦乱に際して陣地を置かれることが多く、弘治2年（1556、または永禄元年／1558）、織田信行（諱：信勝→達成→信成）により城が築かれ、天正

12年（1584）長久手の役に際しては、羽柴秀吉が陣をおき、退却に際して放火したために諸堂・旧記の多くが失われたと伝えられる。慶長3年（1598）、龍泉寺は熱田社の諸神宮寺（如法院、円定坊、宝蔵坊など）を末寺としていた春日井の天台宗・密蔵院の第二十九世秀純によって再興され、現・仁王門が慶長12年（1607）に建立されている。慶長15年（1610）の名古屋城築城以来、龍泉寺は城下の四方を護る尾張四観音霊場の一つとされ、多くの参詣者をあつめて隆盛しつつあり（註1）、円空の巡錫と本像造像も、そうしたなかで行われたものとみられる。その意味で本像は江戸初期の名古屋城下の形成とその賑わいをも今に伝える作例でもある（註2）。

（註1）元和5年（1619）には密蔵院第三十一世・珍祐が初代藩主・徳川義直の信を得て名古屋城東照宮神宮寺・尊寿院の初代別当職となっており、龍泉寺は密蔵院末寺として文政11年（1828）には尊寿院、明眼院に次ぐ規模であったことが指摘されている（遠山佳治「尾張藩における恩赦制と寺院」）。江戸初期以降、現在に至るまで、熱田神宮寺であった天台宗・密蔵院（14世紀創建、本寺東北1.5km）の末寺である。

（註2）明治39年（1906）の火災で、多宝塔（明治28年建立）、仁王門（慶長12年／1607）、鐘楼（現鐘楼は明治40年）を除く堂宇の全てを焼失。境内の焼跡から発見された慶長小判により、現本堂は明治44年再建され、また、昭和39年に城郭を模して宝物館が建てられ、円空仏他の什宝が納められている。

（5）円空仏は全国に5350余体（小島梯次氏『愛知県史 別編 文化財3彫刻』、2013年3月刊）の作品が確認されているが、愛知県下では約3200軀（同書）に及び、現存作例が全国最多の地域であることが知られている。円空仏で国重要文化財の指定例は未だないが、県指定例は出生地の岐阜県（12件、120余軀）をはじめ、北海道、青森県、秋田県、三重県などにおいてみられる。しかし愛知県下では、市指定例は少なくないが（犬山市、江南市、尾張旭市、岩倉市、清須市、北名古屋市長久手市、扶桑町、津島市、愛西市、阿久比町、南知多町、岡崎市、刈谷市、安城市、西尾市、新城市など）、県指定例は現在、皆無であり、名古屋市内に遺る円空仏中の代表作3件（鉾薬師堂諸像、龍泉寺像、荒子観音寺像）も未指定である。代表作・龍泉寺像の市指定を契機として、県の重要な歴史的文化遺産のひとつである円空仏の評価と指定が、一層、促進される必要があると考える。

もくぞうやくしによらいざぞう

1 木造薬師如来坐像

(1) 高さ	45.3cm
(2) 材質	針葉樹材 (ヒノキ)
(3) 技法	いちぼくづくり 一木造り
(4) 指定理由	<p>①頭部の細かい螺髪<small>らぼつ</small>やなだらかな体形、穏やかな顔つき、彫りの浅い衣文<small>えもん</small>に平安時代の仏師である定朝<small>じょうちょう</small>から始まる仏像彫刻様式の影響が認められる。面貌<small>めんぼう</small>や衣文<small>えもん</small>に柔らかな彫口が残ることから、12世紀前半の作例とみられ、摩耗も少なくない小像ではあるが、市内にのこる数少ない平安後期の仏像として貴重であること。</p> <p>②新福寺<small>しんぷくじ</small>は、もともとは庄内川堤内<small>しょうないがわつつみうち</small>の中洲<small>なかす</small>にあったが、慶長19年(1614年)秋の大洪水により、旧新福寺村の村民ごと現在地へ移転したと伝えられている。木造薬師如来坐像<small>もくぞうやくしによらいざぞう</small>は移転前の新福寺<small>しんぷくじ</small>またはそれに附属する十二坊のいずれかから伝来した可能性があり、当地域の歴史的形成を考えるうえで、核となる貴重な遺作例であること。</p>



木造薬師如来坐像（正面）



（側面）



（背面）



（顔面）



（底面）

2 ^{もくぞうぼとうかんのん}木造馬頭観音^{あつただいみょうじん}および^{てんしょうこうたいじんりゅうぞう}熱田大明神・^{つけたり}天照皇太神^{せんたいぶつ}立像（附 千体仏）

<p>(1) 高さ</p>	<p>^{もくぞうぼとうかんのんりゅうぞう}木造馬頭観音立像：113.9cm</p> <p>^{あつただいみょうじんりゅうぞう}熱田大明神立像：101.7cm</p> <p>^{てんしょうこうたいじんりゅうぞう}天照皇太神立像：101.6cm</p> <p>^{せんたいぶつ}千体仏（535点）：3.5～4.8cm</p>
<p>(2) 材質</p>	<p>針葉樹材（ヒノキ）</p>
<p>(3) 技法</p>	<p>^{いちぼくづくり}一木造り</p>
<p>(4) 指定理由</p>	<p>①作者である円空が満44歳時の作品であり、円空が修行者としても作仏者としても確立期に入ったころの力作であり、壮年期の代表作と位置付けられること。</p> <p>②千体仏は円空の活動の特徴づける省略法による^{こっばぶつ たさくぞうけん}木端仏の多作造頭として早期の作例であること。</p> <p>③女神風の頭部をもつ^{あつただいみょうじんりゅうぞう}熱田大明神立像と対の男神である^{てんしょうこうたいじん}天照皇太神立像を^{りゅうぞう ぼとうかんのんりゅうぞう}馬頭観音立像の左右に配する^{さんぞん}三尊構成は円空独自のものであり、その思想を解明するうえで重要な作例であること。</p> <p>④慶長15年（1610年）の名古屋城築城以来、^{りゅうせんじ}龍泉寺は名古屋城から見て鬼門にあたる四方を護る^{おわりしかんのん}尾張四観音の一つとされ、多くの参詣者を集めていた。本像の造像もそうしたなかで行われたものとみられ、江戸初期の名古屋城下の形成とその賑わいを今に伝える作例であること。</p>



天照皇太神立像



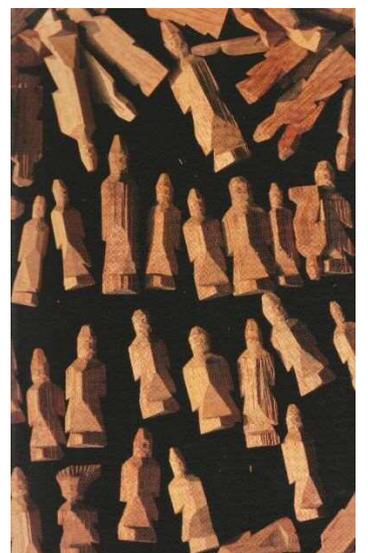
馬頭観音立像



熱田大明神立像



背面墨書銘（左：天照皇太神立像 中央：馬頭観音立像 右：熱田大明神立像）



千体仏（部分）